



外から見ると…

開かれた教会

相手の立場に立つてものごとを見ることは難しい。教会も、こちら側からいつも見ているので、逆の方向から、外から教会を見ることは難しい。

五十年ほど前に開催された第二バチカン公会議や八七年と九二年に京都と長崎で開かれたNICE(福音宣教推進全国会議)の後、教会はいわば「開かれた教会」作りを始めた。閉ざされた教会ではなく、ひろく人々に教会の門戸を開こうというわけ

である。物理的にだけでなく、心理的にも。

この考えは福音の精神に基づいている。救いは一部の人のためのものではなく、すべての人に及ぶものであり、教会は本質的にこの救いの福音を伝える使命を与えられている…という教会の自己理解に基づいているのである。

管理中心の教会

物(建物や財産)や人の管理を中心にしてきた当時の教会にとって、この方針は難しい課題

であり、種々の批判、ひいては非難もされてきた。それは今でも続いている。教会は信者のものである。教会に来るのは信者であり、そこからある種の恩恵を受けるのも信者である。教会は信者のため(だけ)にあるものだという理解。しかし、福音に基づいて教会が自分自身の在り方を問うた時、教会は開かれていなければならないと思う。

物(建物や財産)や人(信者)を管理するのは難しくない。鍵をかけて「入ってこないように」すればいい。しかし、それで福

音宣教の使命を果たしていくことが出来るだろうか。

人を大切にしようとする

きちんと「管理」をしながら、人を受け入れることは難しい。「管理」のみを考え、それを優先するなら、「関係者以外立ち入り禁止」の教会となるだろう。門はいつも閉められ、教会の扉も閉ざされているなら、たとえ鍵をかけていなくても、それをわざわざ開けて入るのには抵抗があるだろう。特に初めて訪れた人にとってはそうだろう。今



やまもと まこと
山元 眞 神父

の時世、鍵をかけるのは常識かも知れない。だからといって教会の門扉を閉めたりするのはどうだろう。聖堂の中にも高価なもの、大切なものがある。それを守るためには防衛する必要があるだろう。しかし、人を受け入れるためには鍵はかけないほうがいい。いつでも、だれでも入って来れて、祈れるようにしておくほうがいい…と思うのだが。

開いてはみたものの

はたして、鍵をかけないで開けばそれでいいのだろうか。そうではなからう。「さあ、おいで」と門戸を開いても、受け入れられる気持ちと自分のここを開く気持ちがあれば福音は伝わらない。

誰でもどうぞ、というのが、この教会の方針。どんな人でも受け入れる、ということ大切にしている。わたしが赴任して

以来八年が経つ。いろんな人が来られた。泥棒はまだ来ていないが…。

信者でない人は外から見ると、教会の中にいる人が気づかないことに気づく。挨拶が自然とできてなかったり、どうしてここに来たの？と言わんばかりにけげんそうな表情をしていたり。教会に来た人が、「あつ、来てはいけなかったのかな」と思わせる雰囲気があったり…。

信者でない人からいろんなことに気づかされる。典礼の中で、何を言っているのかわからなかったり、よく聞こえなかったり、祈りの声が出てなかったり、歌が歌えてなかったり…不思議に思うそうだ。また、ミサが終わってもすぐに急いで帰ったり、うれしい表情がなかったり、信者同士の挨拶もなかったり…。「こんな集いにいつも参加してみたい」と思われるような教

会共同体だったらいいな、と思う。

初めの頃の教会は…「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加えるにつにされたのである。」（使徒言行録2・44―47）。

このような温かい共同体だったら、「日々仲間」が増えていくのだろう。

【教会ホームページ】

<http://www.yukuhasi.catholic.ne.jp/>

<http://www.yukuhasi.catholic.ne.jp/>

【ブログ】

<http://micheleyam.exblog.jp>

新教出版社 <http://www.shinkyo-pb.com>

いのちの歌

東條耿一作品集

東條耿一 著

神山復生病院で受洗し、多磨全生園で夭逝したカトリック詩人。ハンセン病差別の中で絶望と希望を見つめながら、澄明な世界を詩う。待望の初の作品集。

◆ 2625 円



いちばん大事にすべきことは何か

ホセ・ヨンパルト 著

人生で大事だと思われていることを一つ一ついねいに検討しながら、真の生きがいのために道案内をする。著者は法哲学者・イエズス会司祭。心励まされる書き下し人生論。

◆ 1995 円

